

若者が地域活動をつなぐ担い手となるために



岩手県一戸町 北館 卓海

1. はじめに

我が国では、生産年齢人口の減少により、サービス業、建設業をはじめとする各産業で「後継者（担い手）不足」、「人材不足」が課題となっている。これらの課題は産業だけでなく、地域活動でも同様の問題が起きている。総務省が平成 28 年に全国の地域運営組織を対象に行った実態調査によると、継続的に地域活動をしていく上での課題は、「活動の担い手となる人材不足」（86%）が最も多くなっており、次いで「リーダーとなる人材の不足」（57%）が挙げられており、全国の地域運営組織でも「後継者（担い手）不足」、「人材不足」の課題を抱える団体が多い。また、これらの課題は当町も例外ではないと考える。

筆者自身も消防団、地域のお祭り等の地域活動に参加している中で、自分と同世代である 20 歳～34 歳の若者が少ないと実感することが多々ある。多くの若者が地域の活動に参加すれば、同世代の若者との交流が増え、新しい取組が生まれやすいと考える。

また、10 年後、20 年後も地域の活動を継続させていくためには、次の世代へと役割をつないでいく必要がある。そして、地域の活動の次の担い手となるのは、若者であると考えられる。ただし、地域の活動の担い手となるためには、地域の活動に参加し、地域の活動の意義や仕組みを知ること、経験すること、地域の人と信頼関係を築くことが必要であり、ある程度の時間を要すると考える。

そこで、今後も地域の活動を継続して行うには次の担い手となる若者が地域に更に関わることが必要と考え、このテーマを選択した。

2. 一戸町の現状

(1) 一戸町の概要

当町は町村合併促進法の施行により、昭和 32 年 11 月 1 日に 1 町 4 村（一戸町、波内村、鳥海村、小鳥谷村、姉帯村）が合併し、誕生した町である。岩手県内陸北部に位置し、北上山地と奥羽山脈に囲まれ、南西部に位置する標高 1,018m の西岳を頂点に、北に傾斜する丘陵地がほとんどを占めている。総面積 300.03 km²のうち、山林・原野が 61% を占める高原の町である。また、県内第二の大河・一級河川馬淵川が町のほぼ中央部を北に向かって貫流し、市街地は河岸段丘上に発達している。

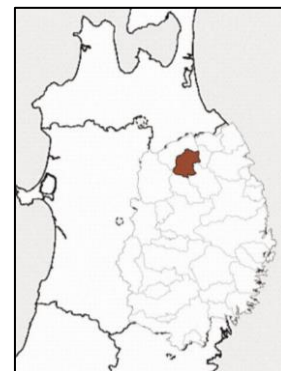


図 1 一戸町の位置

(2) 一戸町の人口推移

当町の人口は、平成 22 年現在で 14,187 人であったが、平成 12 年の 16,933 人から 10 年間で 2,746 人、比率にして 16.2%減少している。平成 22 年からの 10 年間では、令和 2 年に人口は 11,800 人となり、2,387 人、比率にして 16.8%減少（全国平均 3.1%）する見込みである。一戸町人口ビジョン・総合戦略によると、若年女性人口の減少、出生率の低迷、若者の町外流出が減少の要因に挙げられる。

(3) 20 歳から 34 歳の若者の人口推移

20 歳から 34 歳の若者においては、平成 22 年現在で 1,556 人であったが、平成 12 年の 2,103 人から 10 年間で 547 人、比率にして 26%減少している。平成 22 年からの 10 年間では、令和 2 年（平成 32 年）に 1,028 人となり、528 人、比率にして 33.9%減少する見込みである。20 歳前半の就職期から 30 歳前後の就職・転職期の転出が多く、特に就職期の女性の転出が多いことが要因となっている。また、若年女性の人口減少は自然減の原因の一つにもなっている。就職・転職期の転出が多い理由としては、若者の希望に合う就職先（職種、給与、条件、求人数等）が町内に少ないことが挙げられる。

(4) 若者の地域活動への町の支援

一戸町総合計画基本計画では、「若者世代の町内へ定着を図るために、多様な交流機会を設け、また活動を主体的に実施するグループ等を支援する。また、地域活力の維持、児童生徒の地域学習機会の創出のために、三世代交流の重要性を認識し、取り組む町内会等を支援する。」としている。前者のグループ等については、当町では今のところ確認できていない。また、後者についても令和 2 年度以降毎年、地域づくり支援事業で世代間交流を行う地域数を 5 地域にすることを目標としているが、平成 30 年度に行った地域数は 0 地域となっている。これらの要因としては、若者世代の定着を目的とした交流の場がないことや地域活動を実施するグループや町内会等にうまく周知ができていないこと、行政が受け身になり、具体的な施策がまだ描けていないことが挙げられると考える。よって、今後世代間交流に対してどのように行政が関わっていくかが課題である。

3. 一戸町における若者の「地域活動」現状—消防団を例に

当町の消防団を例に挙げると、平成 21 年 4 月 1 日当時、全体で 470 人在籍していたが、平成 31 年 4 月 1 日現在では 407 人となり、63 人、13.4%減少している。また、次の担い手となる若者のうち 20 歳から 34 歳の消防団員は、137 人（平成 21 年 4 月 1 日現在）から 95 人（平成 31 年 4 月 1 日現在）となり、42 人、30.6%減少している。消防団員が減少していることに加え、次の担い手となる若者の減少が著しい状況となっている。

消防団員数の変化と若者の減少に伴い、消防団活動にも変化が生じている。筆者が所属している部では、月 2 回の火災予防活動（夜警）において、以前は 3 班体制により、1, 2 か月に 1 回参加するペースであったが、人数の減少によりほぼ毎回参加しなければいけない状況である。このように一人あたりの負担は、昔と比べて増えている。

4. 筆者のまわりの若者世代の声を聞く

そこで筆者のまわりにいる若者世代 5 人に対し、地域活動への関わり方や考え方について話を聞いた。

【Aさん：32 歳／男性／地元役場勤務／地元在住】

小学校・中学校では地元の学校に通い、高校は自宅から隣の市の学校へ通学した。大学では県外の学校に進学し、その後祖母の介護等により Uターンした。Uターン当初は、自分の居住地域の郵便局で窓口業務にパートタイムで従事。現在は、地元役場職員として勤務している。

＜地域活動への参加のきっかけ＞

地元の地区公民館で同世代の友人が勤務しており、地域の活動に参加しないと声をかけられた。また、自分自身も昔からボランティアなどの活動で人の役に立つことが好きで楽しいと感じる。

＜現在参加している地域活動＞

①消防団

②地元の地区振興会：生涯学習推進部に所属し、主に地区の文化財や神社などを記した「地区マップ」制作に取り組んでいる。

③地元の町内会：町内会の会計担当として、物品の発注と支払い、それに伴う収支管理や総会での決算報告、決算報告のための資料作成をしている。

④地元の青年会：地区の祭りの開催や、草刈り、8月中旬に花火の打ち上げ、冬には子ども会と一緒にクリスマス会を開催している。

⑤ボランティアサークル：主に毎年 6 月上旬に開催される「高原祭り」の運営に協力。また、草刈りや花植え、一人暮らし老人を招待して新年会を開催している。

Uターン当初は、仕事がフルタイムではなかったため、時間的余裕もあり、参加できたが、現在は、仕事がフルタイムであることや、休日出勤の場合もあるため、地域の活動に参加する時間が作れないときがある。新しいことやボランティア活動を行う意欲はあるが、昔から受け継いできた活動や事務的な活動に追われて、時間的余裕もないため、参加できていないのが現状である。

【Bさん：24 歳／男性／地元役場勤務／地元在住】

小学校、中学校、高校は当町の学校に通い、大学は町外の学校に進学した。大学在学中には、授業の一環で東日本大震災の被災地でのボランティア活動に参加した経験もある。卒業後、地元役場への就職を機に Uターンした。

＜地域活動への参加のきっかけ＞

地元役場職員として勤務していることもあり、地域の 40 歳～60 歳の世代（以下、「上世代」という。）の人に声をかけられた。また、地元暮らし、地元の役場で仕事をするため、円滑に暮らしや仕事をするためには、地域との何かしらのつながりを持っておくべきと考えた。加えて、地域活動に参加しないことを理由にはじめから印象が悪くなるのは避ける

べきと考えた。実際に「地域とのつながり」が構築できる地域活動は、日々の仕事や生活でも役に立つことが多いと感じている。また、東日本大震災の被災地のボランティア活動を経験した時に、「祭り」が盛んで「地域とのつながり」が強い地域は復興も早い傾向にあったことから、災害発生などの有事の際には、「地域とのつながり」は特に重要であり、役に立つと考えるようになった。

<現在参加している地域活動>

①消防団

②地元の地区振興会：地域活性事業推進部に所属しており、主に地域活性化に関する事業の企画、運営、推進に取り組んでいる。

地域の中核を担う上世代の人たちが小中学生の頃お世話になった方で自分の親とも同世代であるため、地域活動に参加しやすかった。今ある地域の活動を維持することより、今ある地域の活動の中に溶け込もうという意識で取り組んでいる。

現在の地域活動への希望は、活動に参加する若者が増えることである。昔からの事業を継続的に行うことも大事だと思うが、現在の活動内容で入りたいと思う若者がいるのか疑問に思うことがある。

【Cさん：26歳／男性／地元役場勤務／孫ターン】

東京で生まれてから大学卒業までの22年間、東京で暮らしていた。大学卒業後は、両親の地元であり、祖父母が暮らしている当町の職員として勤務する、いわゆる孫ターンである。

<地域活動への参加のきっかけ>

職場の上世代の先輩から声をかけられた。

<現在参加している地域活動>

①消防団

②お祭りの制作：毎年8月に開催される「一戸祭り」で山車の運行があり、その山車に飾り付ける人形・牡丹などを制作している。

③語青会：会員は約40人在籍しており、仕事のジャンルや年齢の決まりは特にない。地域を盛り上げることを目的とし、「はしご酒」などのイベントの開催や年末に年越しそばのふるまいなどの活動を行っている。一戸町に来た3年目の年に、上世代の同じ地区の地域の方に声をかけられ参加した。参加できる範囲で、打ち合わせや各イベント当日の運営を手伝っている。

孫ターンで、地域の活動や人を知らないことの方が多かったため、地域の活動に参加することで、活動内容や人を知ることができてよかった。加えて、地域の活動は学ぶことが多くあり、自分の仕事だけでなく人生の経験としてもプラスになる。また、楽しむときは楽しんで活動し、自分のペースで活動することも重要だと考える。

【Dさん：21 歳／男性／町外で公務員勤務／地元在住】

幼少期は、父親の仕事の都合で仙台、札幌に住み、小学校中学年の時に、父の地元である当町に定住した。小学校中学年以降、中学校、高校は当町の学校に通い、卒業後は、町内在住だが、別の地域の公務員として勤務している。

＜現在参加している地域活動＞

職場と自宅が離れていることから時間的制約があり、運営や事前の準備には参加しにくい状況である。しかし、子どもの頃に一戸町で行われる「祭り」に参加していたこともあり、現在でも「祭り」当日には参加者として足を運んでいる。

地域の活動に参加する意欲はある。地域の活動は誰かがやらなければいけないと思う。「祭り」を例に挙げると、昔からの伝統的な技法があり、その技法を受け継いでいく必要があると考える。地域に残っている同年代の若者はほとんどいないため、自分が地域の役割を担うだろうと思うことがある。そのため、地域の人から誘われれば、できる範囲で活動に参加すると思う。

全く知らない人たちの輪の中に入ることはとても勇気が必要だ。もし参加するとなれば、地域の活動に若者がいた方が参加しやすいと思う。顔見知りや話がわかる人、自分と地域をつないでくれる人やアプローチがあれば参加しやすいと思う。現在は地元在住で、父親が地域の活動に参加することもあるため、活動内容を全く知らないわけではないが、全く知らなければおそらく参加しないと思う。

【Eさん：21 歳／男性／町外で販売・サービス業勤務／町外在住】

小学校から高校まで当町の学校に通い、卒業後、就職を機に町外の企業に就職した。その後、盛岡市の企業に転職したが、将来的には、当町にUターンする意欲がある。

地域の活動の印象は、活動内容があまりよくわからないが、消防団等の組織のコミュニティが確立されていて、輪の中に入りづらい印象がある。また、地域の活動をしている人も年配の人ばかりという印象がある。

一戸町にUターンすることになれば、地域の人や知人に誘われれば、地域の活動に参加すると思う。ただし、地域の活動内容やメンバーをあまり知らないのも、自分と地域をつないでくれる人がいれば参加しやすいと思う。

以上 5 名の声から、若者における地域活動や上世代の捉え方、若者が地域に関わるために必要なことが見えてきた。

まず、若者の地域活動の捉え方については、BさんとCさんの声から考察すると、Bさんは、地域活動を通じて仕事や暮らしに役立つと考えており、Cさんも人とつながりや活動での経験が自分の仕事や人生にプラスになると考えている。このことから、地域活動に参加している若者は、地域活動を「仕事や暮らしの役に立つもの」として捉えていることが分かった。

一方で、DさんやEさんの声から、地域活動の内容がわからないために、地域活動の負担感などの不安から地域活動をマイナスに捉えていることがわかる。

上世代の捉え方については、上世代の存在が若者の地域に関わるきっかけとなっていることや、Bさんの「上世代が昔からお世話になっている自分の親世代であることで地域活動に参加しやすい」との声から、自分の「親」のように自分を受け入れてくれる存在と考えている。

以上から、若者が地域に関わるためには、「若者と地域をつなぐ役割」、「若者が地域の活動の情報を知るためのアプローチ」が必要であると考ええる。

まず、「若者と地域をつなぐ役割」では、活動に参加している3名全員が、参加したきっかけとして、上世代の地域の人や職場の先輩、友人などから声をかけられたことを挙げていることと、活動を行う見込みがある2名も「自分と地域をつなぐ役割の人」がいれば参加しやすいと思っていることが、その必要性を示している。

また、「地域の活動の情報を知るツール」では、地域活動の内容を知らなければ恐らく参加しないという声や、筆者自身も地域の活動に参加する前は同意見を持っていたことがあり、若者は地域活動に対してマイナスに捉えがちである。そのため、マイナスな面だけでなく、プラスの面も知ることができるアプローチが若者にとって必要とされている。

5. 地域活動を行っている上世代の声

若者5人は、地域活動を行う上世代を、自分を受け入れてくれる「親」のように捉える視点があることが分かった。それでは、上世代の人たちは若者世代をどう見ているのだろうか。今回は時間の制約もあり、40～50歳代の2人に話を聞いた。

【Fさん：50代／男性／地元で自営業／地元在住】

小学校、中学校は当町の学校に通い、高校、大学は県外の学校に進学した。大学卒業後、東京で約10年働き、当町にUターンした。Uターン後は、実家の稼業を手伝いながら、地域と関わっていった。

<地域活動への参加のきっかけ>

最初のきっかけは、同世代で祭り制作の地域活動の中核を担う人から声をかけられたことである。Uターン当初は、祭当日のみ参加していたが、Uターンから4年後、前述の方に声をかけられ、祭りの制作にも参加することになった。また、消防団については、「祭りの制作」と密接な関係にあり、連動している部分が多くあったため、加入した。

<現在参加している地域活動>

①消防団

②祭りの制作・運営：毎年8月に開催される「一戸祭り」で山車の運行があり、その山車に飾り付ける人形・波などを制作している。また、当日の山車運行の管理などを行っている。

③地元の公民館館長：暮らす地区の公民館の管理。

④語青会：前述

<若者世代の捉え方>

若者が地域の活動に参加することは賛成である。ただ、若者は仕事などにより時間的余

裕や精神的余裕がない人もいるのではと思う。また、自分の地域の状況に対して見て見ぬふりをして、当事者意識をもっている若者は少ないように思える。若者は当事者意識を持ったり、求めるものがあれば、自然と参加すると思う。一方で、若者を地域の活動に迎える立場としては、楽しく活動できるシステム作りが必要だと考える。

【Gさん：40代前半／男性／地元で自営業／地元在住】

小学校、中学校は当町の学校に通い、高校と大学は町外の学校に進学。大学卒業後は、関東の企業に9年間勤め、その後当町にUターンした。実家の稼業を継ぎ、稼業以外では商工会や行政の委員などの活動も行っている。

<地域活動への参加のきっかけ>

上世代の地域の人から声をかけられた。

<現在参加している地域活動>

①消防団

②祭りの制作：毎年8月に開催される「一戸祭り」で山車の運行があり、その山車に飾り付ける人形の鎧などを制作している。

<若者世代の捉え方>

若者が意欲的に地域の活動に参加してくれることは賛成であるが、意欲的に地域の活動に参加してくれる若者は少ないと思う。ただし、消防団や祭りであれば、そのような活動が好きな若者もいると思うので、その若者をどのように発掘するのが重要になると思う。また、自分が今（自営業）と昔（企業勤め）の頃を比較すると、若者であっても「自営業や起業している若者」と「会社等で働く若者」では地域活動への意欲も異なると思う。「自営業や起業している若者」では、「地域の衰退＝仕事消滅」と地域の衰退が直接的に自分の仕事や生活に影響を及ぼす可能性が高く、現時点で地域の活動に意欲的に参加すると思う。「会社等で働く若者」だと、地域の衰退が直接的に自分の仕事や生活に影響を及ぼすと現時点で感じている若者は少ないと思う。

6. 若者世代＋上世代の視点からみえる必要なこと

4章で述べた若者世代の考えや求めている視点と、上世代が若者世代を見ている視点とを比較すると、そこには一致している点とズレが生じている点があることがわかった。

まず、一致する点は、「若者が地域に関わることへの考え」、「若者の時間的余裕」、「地域活動への参加経緯」である。

「若者が地域に関わることへの考え」では、若者世代は地域に関わることは、仕事や生活を営んでいく上で必要なことと認識しており、上世代も若者世代が地域活動に参加することは賛成であるとの考えを持っている。

「若者の時間的余裕」では、若者世代のAさんと上世代のFさんの考えが一致している。

また「地域活動への参加経緯」は、若者世代も上世代も、自分より上世代や同世代の友人等から誘われて参加し、上世代もまた、若者世代が求めている「自分と地域をつなぐ役割」を持つ人を通して、地域活動に参加する機会を得ている。

逆に、若者世代と上世代の視点でズレが生じているところは、「若者の当事者意識」である。上世代からは、「地域に対して、当事者意識をもって活動する若者は少ないと思う。」との声があった。しかし、若者世代では、BさんやDさんのように仕事や生活環境、周りの若者の状況から、地域に対する当事者意識があり、参加に意欲をもつ若者がいる。このように、「若者の当事者意識」については、若者世代と上世代で認識のズレが見られる。この原因は、両者がお互いをよく知らないためではないかと考える。若者世代と上世代がお互いのことを知っていれば、それぞれの世代の考えや求めていることが分かり、認識のズレは起きにくい。また、若者世代も上世代の考えや求めていることがわかれば、地域活動に参加しやすいと考える。

以上から、若者が地域活動に関わっていく流れは図 2 のように整理できる。その上で当町では、①のように「若者世代と上世代がそれぞれをお互いに知る機会を持つこと」が必要であると考ええる。

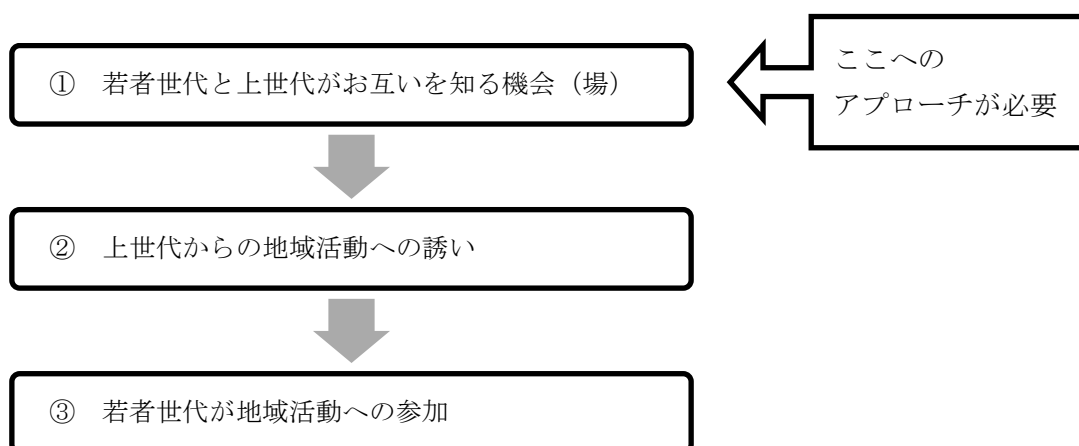


図 2 若者世代の地域活動参加の流れ

7. 若者世代と上世代がお互いを知る機会（場）に対するアプローチの提案

(1) 対象者と方法

そこで、若者が地域に関わっていくために最初に必要な「若者世代と上世代がお互いを知る場づくり」を提案したい。ただし、ヒアリングから若者世代と上世代が直接的に交流することは難しいことから、交流の場に子どもたちを加え、一緒に交流できる機会を作ること考えた。子どもたちを加える理由は、

- ①子どもが将来的に若者世代として地域に関わっていく可能性があること
- ②BさんやDさんのように子どもの頃から地域の上世代を知っていると、地域活動に参加しやすいこと
- ③子どもの参加により若い子育て世代も参加しやすくなり、地域の上世代を知ることができることである。

そこで、「レクリエーションゲーム・スポーツ」で世代間の交流をする企画はどうだろう

か。レクリエーションにする理由は、若者世代、上世代、特に子どもたちが参加するうえで、参加のハードルを下げるためである。加えて、レクリエーションが参加者同士の会話や交流するきっかけにもつながる。また、運営側においても、レクリエーションであれば高度な知識や経験がなくても取り組むことができ、運営側のハードルも下げることができるからである。

また、レクリエーションに近い形で、当町では総合スポーツ大会（競技：野球、卓球、バレー、ビーチバレー等）が年2回開催されている。ただし、18歳以上という年齢制限や競技の知識や能力が必要となることから年々参加者数や参加チーム数が減少しており、令和元年度には1チームしか出場しない競技もあった。そこで、参加者を増やし、世代間交流を推進するためにも、子どもたちを交え、気軽に参加できる種目を追加することが必要ではないかと考える。

（2）企画内容の提案

〈企画名称〉 みんなでレッツ・レクリエーション（仮称）

〈企画内容〉

レクリエーションゲーム・スポーツの中でも、グループ分けをし、グループごとに取り組めるゲーム・スポーツを行う。

〈企画のねらい〉

- ・若者世代、上世代、子どもたちが気軽に交流し、お互いを知ること。

〈企画のポイント〉

- ・参加者には、「名前」（ニックネーム可）と「年齢」（20代など具体的な数字でなくてもいい。）をガムテープ等にかき、服に貼ってもらう。
- ・どのような人が参加しているかを知るために、レクリエーションを始める前に簡潔に自己紹介をしてもらう。
- ・グループに全世代が均等に入るように分ける。
- ・グループ内の会話をより活発にするため、必ず休憩の時間を入れる。休憩はグループ毎に集まってできるように、事前に荷物をグループ毎にまとめて置き、ドリンクやおやつをグループ毎に配る。
- ・競い合うことで、グループ内の団結意識を高める。

〈企画の効果〉

まず、レクリエーションを行う前に、自己紹介をすることでお互いを知り合う機会をつくることができる。また、休憩時間を設けることでレクリエーション内の交流だけでなく、お互いをより知るための会話をする時間をつくることができる。

これにより、若者世代と上世代がお互いを知り合うきっかけとなり、最終的には若者世代が地域活動に参加するための一助となることを期待できる。更に子どもたちと今の若者世代が参加し、交流することで、将来の若者世代と上世代の交流や知り合う機会となり、未来の若者が地域活動に参加するきっかけとして期待できる。

8. おわりに

本稿では、若者世代と上世代のヒアリングから、若者世代と上世代の考えのズレが生じていて、ズレを解消するためには若者世代と上世代がお互いを知ることが必要だと分かった。そこから、お互いを知る機会をつくるための一つの案として、レクリエーションゲーム・スポーツを提案した。提案した内容は、あくまでお互いを知る機会であり、ゆくゆくは若者世代が地域活動に参加すること、ひいては世代間での担い手の継承につながるよう、若者世代に地域活動の実践ノウハウをしっかりと示しておくべきであると考え、それについては今後考察していく必要があると感じた。

また、本稿で作成のために行ったヒアリングを通じて、現在の地域の活動に対しての「思い」や「考え」を聞くことができた。その声は、本稿を作成していなければ聞く機会はなく、自分が地域の活動に参加するうえでも、参考にすべきことがたくさんあったと思う。今後は、このような町の人たちの「思い」や「考え」に耳を傾けながら自分自身も地域の活動に参加していきたい。

【引用・参考文献】

- ・総務省地域力創造グループ地域振興室
「地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業報告書（平成29年3月）」
- ・一戸町 平成30年度 岩手県一戸町 町勢要覧
- ・総務省統計局 平成12年国勢調査、平成22年国勢調査
- ・国立社会保障・人口問題研究所 日本の将来推計人口
- ・一戸町 一戸町人口ビジョン・総合戦略 平成28年3月
- ・一戸町 一戸町総合計画 基本計画 平成31（2019）年度～34（2022）年度
- ・公益財団法人日本レクリエーション協会ホームページ
<https://recreation.or.jp/>
- ・レクリエーション情報サイト「レクぼ」
<https://www.recreation.jp/>